

児童文学における

翻訳作品のとおりみち

—The Happy Prince の場合—

高橋 久子

〔はじめに〕

それが誰の翻訳によるどの出版社から出ていた本であったのか、当時5才だった私にその記憶はない。ただ、プレゼントしてくれた床屋のおじさんの善意にもかかわらず、初めて読んだ『しあわせの王子』は、なんだかひどく息苦しいものとして、そのあと、ずっと私の中にわだかまりを残すことになった。そして、大学二年生の夏、私は再びこの『しあわせの王子』と出会ったのだ。

文化祭の出し物としてクラス全員で『しあわせの王子』のかけ絵をやることになり、なるべくコンパクトなかたちでと、子ども向けにダイジェストされたテキストが、友人の手によって選り出されたのである。このテキストに目を通した瞬間、15年近く前、初めての作品に出会った時のとまどいと息苦しさがまざまざとよみがえってきた。そして今度は、おぼろげにはあるが、息苦しさの正体が何であるのかがわかってきた。たぶんそれは、2つある。

ひとつは、ひどく思わせぶりな、王子の行為の描かれ方に対する反発であったのではないかと思う。町を見下ろす美しい銅像である

王子が、貧しい人々の暮らしをみるにみかねて、越冬のためにたちよったつばめに頼んで自分の体を飾る宝石を与え尽くすという王子の行為が、そのことによってぼろぼろになり果てはうち捨てられるという外観のおちぶれを強調することによって、いっそうの美談に仕立てあげられていることへの疑問があったのだ。読者に王子に対するあわれみの情をもたせることによって王子を聖者に仕立てあげようとする論理のうさんくささを感じていたのだと思う。(王子はそうしたいからそうしたことじゃないのか)という純粹な思いが、確かに子ども読者であった私の中に、あった。

さてダイジェスト版『しあわせの王子』がもたらしたもうひとつの息苦しさは、つばめの人生の意味づけについてであった。

私が生きた日本語のテキストを読んだ限りでは、つばめは一刻も早く南の国へ行きたかったのだが、執ような王子の願いを、断わりきれず、ずるずると居とどまって使いをしているうちに、とうとう生命をおとってしまった、という風にしか読めず、(気の毒に、王子につかまってしまったばかりに……)と思わずにはいられなかった。ところが、つばめの死を伝える作品の語り口には、(いた

ずらものつばめさんも王子の心やさしさにふれ町の人々のために
尽くすことができるようになったのですよ」と、身勝手なつばめ
よいつばめへの変化を讀えようとする雰囲気が充ちみちていた。と
ころが、ストーリーをそのまま読んでいく限り、どうしても、つば
めの中に、町の人を救いたい、町の人のために尽くしたいという強
い動機づけは、見出し得なかつた。いったい、つばめの死は、何
を意味しているのか。この疑問が、もうひとつの息苦しさをうんで
いたのだ。

ところが、このことがきっかけとなり、オスカー・ワイルド原作
“The Happy Prince”を讀み、非常に驚いた。この二つの息苦し
は、どちらも、翻訳、そして日本版ダイジェスト化の段階で生じて
きたものだとかつたからである。つまり、原作には、王子の外観
の衰えを過度に誇張する表現はみられなかつたし、つばめは、王子
のいる町へ飛んでくる前に河原の葦との世俗的な恋愛ざたを起こ
し、その破局を経験してきていることが語られていたのである。
(幼い頃私の讀んだ日本語版『しあわせの王子』には、つばめと葦
との恋愛については一切語られていなかった。)葦との恋愛の経験
の記述は、王子のもとへつばめが居とどまつたことの意味づけに、
王子との愛情の深まりが大きくかわつていゝるであろうことを予想
させてくれる。

こうしてみると、幼い時から私がずっと抱えつづけてきた息苦し
さは、ワイルドの作品自体がもっているものではなく、翻訳という
作業を通じて生じてきたものであるらしい。そして、これを機に
“The Happy Prince”のいくつかの翻訳作品を讀み較べてみると、

どうやらそれは訳の正誤といった個別の問題ではなく、日本人或い
は日本という国が持つ共通の価値観、美意識、そして子どもに向け
て物語を語ることにへの意識といったものが、横たわっているのでは
ないかと思うようになった。

そこで今回は、オスカー・ワイルドが“The Happy Prince”とい
う作品をとおして何をどう伝えようとしたかというワイルド論では
なく、日本で翻訳紹介される場合に、さまざまな訳者、年代、読者
グレードを越えて、なおかつ共通な無意識の操作が働いているので
はないかという仮説のもとに、その操作の根底にあるものを探つて
みようと思う。

いうまでもないことであるが、これまでオスカー・ワイルドの創
作活動全般にわたる目くばり、その中の“The Happy Prince”の
位置づけ、またワイルドが“The Happy Prince”を執筆した当時
の彼の置かれていた状況、屈折したキリスト教観等については、こ
れまでに優れた論説がある。これらについては、今回の問題意識と
の直接のかかわりあいは薄いので、代表的なものを末尾に記すにと
どめ、今後の考察につなげていくことにしたい。

〔方 法〕

“The Happy Prince and Other Tales” (1908) の中の “The
Happy Prince” を原テクストとし、全センテンス203文を、日
本語の翻訳作品と比較対照する。比較の基準として、原文の1セン
テンスごと、その意味内容がほぼ忠実に再現されていれば、一致
省略されていれば「省略」また表現されているニュアンスが多少違つ

ていたり、簡略化されていたり、また付け加えられた文章がある場合は「改変」のチェックを行なった。この際、原文センテンスに該当する訳文が前後したり、二文以上に分割されたり、逆に複数センテンスが一文にまとめ訳されている場合も、意味内容が一致していれば「一致」のチェックを行なった。また、原テキストの1センテンスの中でも、独立させてその意味内容をとりあげた方がよいと思われる部分が含まれているものについては、例えば、センテンスNo165を、(165—v) I am covered with fine gold," said the Prince, "you must take it offleaf by leaf, and give it to my poor."
(165—d) the living always think that gold can make them happy."
という風に分けて検討した。

なお、訳文の中に、該当する原テキストのセンテンスがないような独自の表現がみられる場合は、「脚色」として、その表現(文)をそのまま記録していった。

比較対照を試みた翻訳作品は、表1に示した通り。これは1910年～1989年までに児童書として出版されたもの(絵本も含む)で、現在入手可能或いは閲覧可能であった50作品である。以下、分析、検討の中では、それぞれの作品は、表1に記した通し番号で表わすことにする。

表1 翻訳作品一覧

作品No	訳者名	資料名	出版社名	出版年
①	田波 御白 (訳)	皇子と燕	東亜之光(雑誌)	一九〇〇
②	本間 久雄 (訳)	童話集 柘榴の家	春陽堂	一九〇六
③	菊池 寛 (訳)	小学生全集 第17 外国文芸童話集	興文社・文芸春秋社	一九〇六
④	浜田 広介 (訳) (訳編)	ひろすけ訳 世界童話選集	文芸書院	一九三三
⑤	吉田絃次郎 (著)	童話集 子犬と小鳥	第二書房	一九〇六
⑥	平塚 武二 (編著)	しあわせの王子(世界名作童話全集10)	大日本雄弁会 講談社	一九〇六
⑦	阿部 知二 (訳)	世界名作選第2(日本少年民文庫12)	新潮社	一九〇六
⑧	阿部 知二 (訳)	世界少年少女文学全集 第6巻	東京創元社	一九〇六
⑨	志村 明子 (文)	しあわせな王子さま	日本書房	一九五五
⑩	上田健二郎 (編著)	しあわせな王子さま	保育社	一九五七
⑪	白木茂 坂長半 (編)	おもしろくてためになる世界名著ものがたり(一年生)	東西文明社	一九六六
⑫	山主 敏子 (訳)	しあわせの王子	実業之日本社	一九六六
⑬	荒 正人 (訳)	少年世界文学(一年生)	実業之日本社	一九六六
⑭	磯部 忠雄 (編著)	幸福な王子(初級世界名作童話13)	泰光堂	一九六九
⑮	杉木 喬 (訳)	わたくしたちの世界名作 童話全集4 イギリス篇	同和春秋社	一九六九
⑯	浜田 広介 (著)	児童世界文学全集1 世界童話名作集	中央出版社	一九六九
⑰	小倉ゆり子 (訳)	こうふくなお(ようねん文庫)	中央出版社	一九六〇
⑱	松村 達雄 (訳)	世界童話文学全集5 イギリス童話集	講談社	一九六〇
⑲	小出 正吾 (編著)	世界の名作童話(三年生)学別 幼年文庫(三年3)	偕成社	一九六〇

作品No	訳者名	資料名	出版社名	出版年
37	足沢 良子 (訳)	世界の名作図書館 4	講談社	一九六七
38	久米 元一 (訳)	世界の童話6 イギリス童話集	講談社	一九六五
39	大石 真 (訳)	しあわせなおうじ(母と子の名作童話8)	集英社	一九六五
40	渡辺 桂子 (著)	王さまの童話集(たのしい幼年童話2)	あかね書房	一九六五
41	皆河 完一 (訳)	少年少女新世界文学全集5	講談社	一九六四
42	岸 なみ (文)	しあわせの王子(なかよし絵文庫五)	偕成社	一九六四
43	松村 達雄 (訳)	世界の名作どうわ(幼年絵文庫全集7)	国土社	一九六三
44	土家由岐雄 (文)	世界の名作どうわ(幼年絵文庫全集7)	偕成社	一九六三
45	加藤 雅美 (文)	しあわせな王子さま(幼年文庫四)	日本書房	一九六三
46	平井 芳夫 (文)	しあわせな王子(幼年世界名作文学全集16)	小学館	一九六三
47	平塚 武二 (訳)	世界名作童話全集2	講談社	一九六二
48	新川 和江 (文)	世界名作童話名作文庫1 イギリス篇1	小学館	一九六二
49	秋田 雨雀 (編)	少年少女 世界名作文学全集27 世界童話選	小学館	一九六二
50	久保 喬 (編著)	しあわせの王子(児童名作全集)	偕成社	一九六二
51	大木 雄二 (訳)	幼年世界文学全集 第2	偕成社	一九六一
52	加藤 清美 (著)	別世界児童文学全集	日本書房	一九六一
53	渡辺 桂子 (著)	王さまの童話集(たのしいシリーズ5)	誠文堂・新光	一九六〇
54	宮津 博	放送劇脚本集(学校劇シリーズ5)	社	一九六〇

作品No	訳者名	資料名	出版社名	出版年
38	西村 孝次 (訳)	中学生の文学 第5	ポプラ社	一九六六
39	足沢 良子 (文)	ワイドカラー 世界の名作童話集 第16	講談社	一九六六
40	横 皓志 (文)	しあわせのおうじ(トッパのおはなしえほん2)	フレール館	一九六九
41	前田 松男 (絵文)	幸福な王子(世界名作童話絵本18)	高橋書店	一九七〇
42	神宮 輝夫 (訳)	子どもの世界文学2 イギリス編2	講談社	一九七〇
43	奈街 三郎 (文)	世界の童話 オールカラー版48	小学館	一九七三
44	大石 真 (訳)	母と子の名作童話 第8	集英社	一九七三
45	松村 達雄 (訳)	幸福な王子	玉川大学出版部	一九七七
46	田口みのる (訳)	しあわせな王子(世界の名作童話シリーズ)	佑学社	一九七六
47	宮脇 紀雄 (文)	あいうえお順 名作百科第1(世界の名作 上巻)	学習研究社	一九七五
48	岡 信子 (文)	しあわせのおうじ(せかいの名作ぶんご)	金の星社	一九七六
49	中村 惇子 (脚色)	幸福な王子(音のえほん・世界名作童話)	朝日ソノラ	不明
50	井村 君江 (訳)	オスカー・ワイルド童話集 幸福の王子	マ 偕成社	一九六九

(分 析)

①原テキストのストーリーはどのように保存されてきたか？
 まず、翻訳50作品中、80%以上の作品で「一致」のチェックが
 成されたセンテンスをつないでいくと、次のようになる。()
 内は原テキストのセンテンスNoである。

町の上高く王子の像が立っている。(1) 王子は、人々に讃美されている。(3) ある夜、この町にツバメが一羽とんでくる。

(11) ツバメは、銅像の足もとで翼をやすめようとして(30、31) 王子が泣いているのに気づく。(39) 王子はツバメに、母親が病気で寝ている子どものところへ剣のルビーをもっていってくれるように頼む。(59) ツバメは、エジプトに行かなければいけないながらも(61)、王子の頼みを引き受ける。(73) 戻ってくと今度は貧しい男のところへ(88)、片目のサファイアをもつていくように頼む。(116、118) ツバメは、友だちがエジプトで待っているといいなながらも(103)、いわれたとおりにする。(122) 戻ってくる(132)、今度はマッチ売りの少女に自分のもうひとつの目をぬきとって与えるように頼む。(133、143) ツバメはいわれたとおりにする。(147) ツバメは、いつまでも王子のそばにいたいという。(153) 王子は自分の体の金ばくをはがして、貧しい人々に与えてくれとたのむ。(165) ツバメは、いわれたとおりにする。(166) 雪がふり始め(169)、やがてツバメは死んでしまう。(173) きたなくなった王子の像はとりこわされた。(193)

こうして原文との一致率の高かった文をつないでみると、そのほとんどが、ストーリーの筋にあたる部分で、これは再話の特徴的な傾向として佐藤宗子が提示した「ストーリーの単直線化」^(註)と一致する。ただし、ストーリーの筋にあたるセンテンスであるにもかかわらず、一致しているものが半数以下であったのは、次のとおり。

・つばめが王子のいる町に飛んでくる前に体験した葦との恋とその破局を描いたセンテンス(12、26)

・ツバメの死によって王子の鉛の心臓がまつぶたつに裂けたこと。そして、その後のてん末について描いたセンテンス(180、203)

センテンス No 12、26 は、省略されているものが多く、センテンス No 180、203 は、改変、省略が、多くみられた。

では、こうしたストーリーの筋にかかわる部分の、省略、改変といった操作は、何を意味しているのだろうか。

② ツバメと葦との恋愛の省略を考える

ツバメは、河原の葦との失恋の痛手をもって、王子に出会っている。ツバメは葦の外見の美しさ、すんなりとした腰つき (*her slender waist*) に魅かれて恋をした。そして、彼女とことばを交わしあえないのを不満に思い、風との仲を疑い、自分と同じ趣味を強要する。つまり、「愛」を求めるもの、求めて相手から与えてもらうものとしてしかなかったツバメは、そうした「愛のかたち」につまずいて、そのあとで王子に出会っているのである。このことの延長線上に王子とツバメのかかわりあいを見ていくと、王子の求めるものに答えていくツバメの姿に、王子との愛情の成立過程が浮かびあがってくる。それは、かわいそうな町の人々への献身、或いは自己犠牲といった解釈とは、別次元のものである。この、「王子との恋愛」という視点を、翻訳作品は否定しようとしたのではないか。

“The Happy Prince and Other Tales” を発表した1888年当時のワイルドは、貴族の美青年アルフレッド・ダグラスとの同性愛を経て、普通の結婚をし、2児の父となろうとしていたが、作家として大成するかどうかもわからない不安定な時期で、15も年下の青年に誘惑され、同性愛の常習犯へ陥ろうとしていた。

こうした彼の背景をして、すぐさま王子とツバメの関係にながていくことはできないが、少なくとも、王子とツバメのあいだの精神的なつながりが深まっていたことと、ツバメが輩との恋愛の挫折を経験してきていることは、無縁ではなさそうだ。このことに続けて、王子とツバメのあいだの恋愛的要素が、意図的に排除されていると思われるその他の箇所を、1センチテンスごとに見ていくことにする。

・センチテンス No 171—b

The poor little Swallow grew colder and colder, but he would not leave the Prince, he loved him too well.

「王子をそれほどまでにツバメは愛していたのだ」という斜線の意味内容が残されている訳文は、50作品中24、それ以外の作品では、この箇所が省略あるいは**改変**されていた。**改変**の中味は、「すっかり王子が好きになっていったから」(作品No 7、⑧)「それほど王子をしたってゐたのです」(作品No ③)「王子さまを心からうやまっていたからです」(⑩)、また訳文の中で新たに追加された文章として、「まだ、おとなになりきらない、子どものつばめでした」(⑳)といった表現がみられるものも

あり、これらによって、王子とツバメとの関係が対等なものではない、という設定をつくりあげようとしているかのようだ。続けて他のセンチテンスをみると、

・センチテンス No 75

“Good—bye, dear Prince!” he murmured, “will you let me kiss your hand?”

「おわかれです。王子さまの手にキスしてもいいですか?」という、この問いの**一致**は、作品中28で、比較的訳文に生かされる率が高かつたのであるが、これに対する王子の答の方は、

・センチテンス No 176—b

but you must kiss me on the lips, for I love you.”

「いや、くちびるにキスしておくれ。ぼくは君を愛しているんだから。」といった原テクストの意味と**一致**しているものは、50作品中21で、残りは、全く省略してしまう、或いは「キス」という行為を「あいさつ」に変える(⑩、㉔)とか、ツバメの頼みも「手にさわらせてくださいませ」(⑩)に変えておいて、王子の答を「口びるにさわっておくれ」(⑭)としてしまう。もしくは、王子の語りくちを「手なんかでなしにくちびるにキスしてくれなくちゃだめだよ。ぼくほんとに君が好きなんだから」(⑱)という風に幼くみせかけることでキスの意味合いを軽ものに仕立てる、逆に「さあ、わたしのくちびるにキスをお願いします。わたしはおまえがすぎだから、さあ、くちびるに。」(⑥)といった風な命令口調で、威圧感を出し、王子とツバメの主従関係の中での行為として読みとらせようとする、などの操作が

みられる。これらの「**改変**」はみな、「**口づけ**」に対するカッコつき
の教育的配慮ということできくられそうである。

③王子の鉛の心臓がふたつに裂けてからの「**省略**」「**改変**」の意味を
考える。

・ センテンス No 80・ No 181

At that moment a curious crack sounded inside the statue,
as if something had broken. the fact is that the leaden heart
had snapped right in two.

ツバメの死とともに、王子の心臓がまっふたつに割れて、な
にかがこわれたような、みょうな音がしたというのは、非常に
重要な意味をもっていると考えられる。人のために、自分を飾っ
ていた宝石を与え続けていた時には気づかなかった何かもつと
深い大きな「**へいたみ**」を、ツバメの死の瞬間に、王子は初めて
知ったのではないか。そしてその「**へいたみ**」は、王子の銅像と
しての生命をも閉じさせるものであった。この世の中には救い
きれない貧しき人々が、まだ数えきれないほどいることから考
えても、恐らく「自分の役目は終わった」「できるだけのこと
はした」といった充足感によって生命を完了させたとは思いが
たい。人々の貧困、或いは貧困を救うことのできない己れの小
ささといった哀しみとは別の次元の、さらに深い感情に、王子
は一瞬つつまれたのではないかと考える。このシーンを
「**省略**」していくということは、王子と燕の愛情のゆきつく先を
見ようとするものではないだろうか。

次に、これに続くラストシーンで、権力者たちのいがみあい
(センテンス No 183-201)を「**省略**」してしまったり、「この町でもつ
とも尊いものをもってくるように」(センテンス No 202-1a)とい
う神から天使への指示と「おまえのもってきたものは正しい。
鳥は天国の庭でとこしへに歌をうたわせ、王子には、わたしを
ほめたたえさせよう」(センテンス No 203)という神の行為の多
くが「**省略**」「**改変**」されていたことの意味を考えてみる。

市長や議員たちの自己顕示欲むきだしシーンを「**省略**」した
というのは、大人の汚れた打算や思わくを子どもにみせまいと
する、これまたカッコつきの教育的配慮ではなからうか。

また、王子の心臓とツバメの死骸が天国へ運ばれるという
シーンの「**省略**」については、子どもに読ませる文学作品に宗教
的意味あいを投影させることに神経質な日本の土壌が背景に
あって、王子の最終的な「**しあわせ**」の獲得を、天国で神を讃
えうるということと、日常的感觉として結びつけ難かったの
ではないかと思う。事実この部分の「**改変**」のパターンをみてみる
と、「**しあわせなおうじ**」とつばめは、いつまでもいつまでも
てんごくのにわでくらしました。(②7)とか、「王子とつばめは、
もとのすがたにもどって、てんごくへのほっていきました。そ
して、なかよくいつまでもしあわせにくらしました。」(②8)と
いう風に、ごみばこに打ち捨てられた状態(「**ふしあわせ**」)
に対する救済のかたちで、漠然と「**しあわせ**」が強調されている
ものが、かなりあった。また、「**しあわせ**」の王子は、これまで
のように金色にかがやき、——後略」(②9)という風に、もと

どおり金色で輝きつづけること、つまり王子が捨てようとしたみかけの美しさを回復させることに、幸福の到達点を重ねてしまっているものや、「つばめのからだにもおうじさまのからだにも、ゆきがしろくつもっていきました。」(⑩) という叙情的な終わり方にしてしまっているものもあった。

このように、日本語訳の中では、その扱いがためらわれがちであった、神の意志による救済というモチーフであるが、ワイルドの評伝作者であるヘスケス・ピアンは、その書の中で「ワイルドは、イエスキリストの個性に関心をいだき、それは年を追うごとに強まり、はては自分をほとんどキリストと同一視して、しばしば譬え話の形で語った。」と述べており、ラストシーンでの神のことは、ワイルド自身のことばとして重ね読むことも可能であったことがわかる。

ここまで①③と、ストーリーの筋がどのように形容されてきたかを追いかけてみた。それによって、子どもに恋愛感情をあらわに伝えまいとする、大人の権力争いをみせないようにする、宗教色を遠ざけようとする、といったいわゆる教育的配慮という意識が強く反映されているのではないかと推測された。

④ストーリーの筋とは直接関係がないのに一致の多かったセンチメンスについて。

先に述べたとおり、単一化の法則にのっとり、原文との一致率の高かったセンチメンスは、ストーリーの筋にかかわるものであった。しかし、80%以上という基準にはみたなかった

が、筋とは直接関係のない部分で一致率の高かったセンチメンスが2つあった。それは王子の願いをきき届け、病気の母親の看病をする子どものもとへ王子の剣のルビーを運んだツバメがもらすことばと、それを受けた王子のことばである。両センチメンスとも、50作品中37作品に、その意味内容が残されていた。

・センチメンス No 89

“It is curious,” he remarked, “but Heel quite warm now, although it is so cold.”

・センチメンス No 90

“That is because you have done a good action,” said the Prince.

「へんだなあ、外はこんなに寒いのにぼくはこんなにあったかい」と不思議がるツバメに「それは君がよい行ないをしたからだ」という王子。この二つの会話は、翻訳の際にも忠実にペアで再現され、ツバメのしたことが他人のために尽くすよい行ないであったという意味づけが尊重される。ここにも、非常に道徳的、教育的ニュアンスの強い箇所として、翻訳の課程で、筋とは無関係でも残存しやすかったのではないか。

こうした翻訳作品の中での「読ませよう」とする思いは、例えば、1955年日本書房から出版された『しあわせな王子さま』(⑨) の中での志村明子の解説に、

『しあわせな王子さま』は、おのれを殺して仁をなす絶対愛の境地にこそ、最高の幸福があるという物語です。この物語は、お子さまたちに高い情操をつちかわせるのに役立つことと思っ

ております。」とするざれていることなどからも、うかがいし
ることができるとは。

⑤王子にとつての「幸福」とは何だったのか？

・ センテンス No 165—b

the living always think that gold can make them happy.”

・ センテンス No 157

There is no Mistry, so great as Misery.

上に示した2つのセンテンスは、王子にとつての「真の幸福」
の意味を伝える重要なかぎをにぎっていると考えた。

先ず、No 165—bは、ツバメから、なおもたくさんいる町の貧
しき人々の様子をきいて、自分の体の金ばくをはがしてその
人々へ渡してくれるようにと告げたことばにつづくものであ
る。「生きている者たちは、黄金さえあれば幸せになれると思っ
ているのだから。」といった意味内容である。このセンテンス
を読むと、王子自身は、黄金を幸せの本当の要因であるとは考
えていないことがわかる。つまり、王子は、自分のルビーやサ
ファイヤや金ばくを与えるのは、人間たち（生きている者）た
ちがそれを求めるからだけで、そういった行為によって生きて
いる人々が得る「幸福」と、自分にとつての「幸福」の意味が
ずれていることに気づいていたのではないか。そのずれに対す
る不可思議な思いと葛藤が、センテンス No 157に表わされてい
るのではないかと考える。

さて、翻訳の実態をみると、センテンス No 165は、原文と

児童文学における 翻訳作品のとおりみち — The Happy Prince の場合 —

一致していたものが、50作品中17で、全く省略されているも
のが27作品もあった。また、「金さえあれば、たいいのものは
買えるんだから」(26)とか、「きつとそれでその人たちはし
あわせになれるとおもうんだがね。(14) という風に、王子が
与える金に王子自身も価値をおいていると読める、いわば原文
とニュアンスが逆なのが50作品中6作品にみられた。

No 165—bの意味と関連させて No 157を考えてみると、原文中
の Misery の意味は、人の心のもちよう、ありようも含めた「不
幸」というか、「貧しさ」をさしていると考えられるが、日本語
訳の多くが、もつと即物的な意味での、いわゆるマイナスの状
況、つまり貧困や貧困による苦しさを他者によって救済可能な
もの、という捉え方をしていた。例えば「なによりもわたし
が不思議に思うのは、人間たちの苦しみだ。つらいことであつた
り、悲しいことであつたりして苦しむ人間のすがただよ。わた
しはその人たちをなんとか助けたい」(25)「わたしには、一ぱ
んふしぎにおもえることは、この世のなかの人たちが、つらい、
くるしいめにあつているということだよ。なぜ、気のどくな人
たちが、たすけられないでいるのか、そのわけがわからない。」
(16) といった風に。けれど、本当の意味での Misery は自分
自身によつてしか救われないことを、原作の王子は、しつてい
たのだ……。

⑥その他の印象操作について考える。

それでは最後に、原テクストの各センテンスごとの比較に捉

われず、例えば、原文にはないセンチメンズが付け加えられていたり、原文のある一部分を脚色してみせているものを追っていくことで、何か共通した印象操作が浮かびあがってこないかどうかを検討してみることにする。

まず、王子とつばめのくり返し頼み頼まれる場面を、途中で原文にない合の手を入れたり、王子に誘導的な質問をさせたりして、かけひきとして強調してみせるものが数多くみられた。例えば、「ほうー、それはすごいなあ」「ふんふん」「なるほど」という風に、ツバメの話にあいづちをうっておいてから」ところで、たのみがあるんだが」という風にもち出してみたり(24)と(25)、「ねえ、つばめ、おまえもかわいそうだと思わないかい?」ときいておいて、「思いますよ」とツバメがこたえたと、「それではつばめ、おねがいだ」と間髪を入れず切り出したり、(9)、「ねえつばめくん、あのわかものをほおっておいてもよいだろうか」という風に誘導尋問的なかたちをとったり(24)、「おとうさんやおかあさんもない。小さいもうとやおとうとがまっている。」とお涙頂戴式に訴えようとするもの(34)、「それではあしたもう一日ばくのところに泊まって、あさってたつたらよいではないか」「きみがそのくにはやくかえりたいきもちはわかるけどどうかぼくのおねがいを」とかなり強引なもの(両文とも9)、等々さまざまな脚色がみられた。こうした脚色化は、王子のひたむきさよりも、かけひきの妙を読むことに、読者の目をひきずってしまう。それは訳が意図したことではなからうが、五才の私が初めてこの作品にふれた時に(ツバメは王

子にうまくいくるめられて気の毒に)といった印象をもったのも、こうした操作と関係がありそうだ。

また、自分の体を飾っている寶石を与えていくシーンの翻訳作品の描き方も、自己犠牲の美学の下地をつくっているように思えた。

例えば「いいんだよ、わたしはどうせ立っているだけのからだなのだから」(43)とか、「いいんだ。ほくはどうなってもかまわない。」(43)というように、王子に必要以上に自分を卑下させたり、「おうじはさびしそうにわらっていいました。いいんだよつばめさん、あのこが、それで、たすかるんだもの」(48)とか「つばめよ。わたしのかたほうだけの目は、今夜もかなしいものを見てしまったのだよ」と王子さまはしずんだ声でいきました。(26)といったニヒリステイックな王子像を描くことによって、外から(読者側から)の王子評価をもちあげようとする一つの操作ではなからうか。また、「たつた一つの目をとれば、おうじさまはめくらになるんだ。いやだ、いやだ、そんなこと」(26)とか、「ま、まさか、めをひきぬくなんて!」(49)といった劇画的口調で、読者の感情をもちあげようとしているものもあった。また、王子の目からサファイヤをぬくシーン、あるいは金ばくをはがすシーンを「ではつつきますよ。なるべくそつとやりますから、いたかつたらいいたいってくださいね」(26)、「くちばしで青くかがやく目をつつきました。時間をかけてとうとう石をほりだしました。王子の片方の目は、ほらあなのようにくぼんでしまいました。」(26)、「からだのこ

わをはがすように、あなたの金ばくをはがすのですか。」(27)、
「金がはがれて、おうじのからだは、黒くきたなくなりましした。
手も足も、かおも、あたまも、かわがむけたようになりました。
もう、さらさらでも、ぴかぴかでもありません。」(27)のよう
に、わざといたいたしさを強調してみせるもの。他に、「おう
じはかたになみだをうかべながら」(44)と、わざわざ「か
たぬ」に傍点をふって表わしたり「しあわせのおうじの一つし
かない目に」と、これも、王子の背負うハンディを讀者の哀れ
みをさそうために使っているようだ。

これらの脚色は、結局、どれも、王子が人々を救うために支
払った代償がどれほど大きいものであったかを讀者に納得させ
るための印象操作であつたといえるのではないか。ここには、
支払う代償が大きければ大きいほどその行為は美化されるとい
う日本人の意識構造が横たわっているようだ。

最後にこれは、脚色の番外編として、作品No④④をあけておき
たい。ツバメが王子に「あなたはめくらまでになつて、まずし
い人たちのためになつてます。」という、王子は「いやいや、
小さなつばめよ、わたしはまだまだせいたくだ。」と答える。
これは、原作の中で解釈しうる、自分の幸せの本当の意味をつ
きつめずにはいられなかつた王子が、「自分のため」に行なつ
た「与える」という行為が、ここでは「せいたくをつつましく
する」という、次元の違う「自分のため」の行為として描かれ
ている。

[まとめ]

ここまで、⑥つの視点から、日本の翻訳作品における印象操作の
ゆくえを追つてみた。その結果、ワイルドが原作の中で伝えようと
した、ツバメと王子の幸福は、自分を犠牲にして他者を救うその行
為にあるのではなく、そうした行為によって自分とは何であるのか、
自分にとつての愛の意味は何なのかをさぐりつつけることの中に
あつたのではないか。ところが翻訳の課程では、王子が人々を救う
ために支払った代償が大きいほど彼の行為は美化され、その美意識
が幸福感とすりかえられているのではないか。そして、この美意識
を道徳的意識や教育的配慮といったものからめとつて、子どもに
伝え読ませようという傾向が強かつたと結論づけたい。

1963年に出版された『しあわせな王子』(作品No②③)の中で、
本多顕彰は、こんな解説を書いている。

「『しあわせな王子』は、身につけた美しい価値あるものを全部は
ぎとつて、貧しい人たちに与えることによつて、ふしあわせな人た
ちの仲間入りをし、その人たちをなぐさめようとする精神をえがい
ています。」

けれど、王子は、決して不幸な人たちの仲間入りはしなかつた。
与えても与えてもなお彼の魂は孤独でありつづけ、その孤独をいや
したのは、ただひとつ、ツバメの愛、そして、自らの愛する心、だ
けだつたのではないか。こう考えることによつて、初めて私は、五
才の時から抱えつづけてきた息苦しさを開放されたのである。

「The happy Prince」の日本における翻訳作品に共通して流れる、意識構造をひきたそうと検討を重ねてきた。しかしこれは、大ざっぱな網のかけ方であるといえる。今度は、翻訳作品の発表された年代ごとに、もう少し細かな、共通した意識構造が見え隠れしているのではないかと、予測のもと、今子ども読者の意識の変化という問題ともからめて、分析を続けてみたいと思う。

尚、この稿の一部は、第29回日本児童文学学会の席上で発表した。

注1 佐藤宗子「再話の倫理と論理」『日本児童文学』第27巻6号、

1981

注2 Pearson, Hesketh. "O.W:His Life and Wit." Harpers,1946

WILDに関する文献（「はごめ」の項に照らして）

・ Brasol,Boris,"O.W The Man The Artist,"Williaj and Norgate, 1938

・ Brennard, Frank. "O.W," Lands borough, 1956

・ 平井博『オスカー・ワイルドの生涯』松柏社、1963

・ Hopkins, R. Thurston "O.W:A Study of the Manand His Work Lynwood,1913

・ Mason, Stuart,"Bibliography of O.W.",T.Werner Laurie,19

14

・ 和気律次郎『オスカー・ワイルド』春陽堂、1913

・ Wild, Oscar "The Letters of O.W.",Rupert Hart-Davis,19

62